慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	シャミッソーの言語観 : フンボルトの言語論と比較して
Sub Title	Chamissos Sprachauffassung : Im Vergleich mit Humboldts Sprachtheorie
Author	秋山, 大輔(Akiyama, Daisuke)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	2007
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.24 (2007. 3) ,p.65- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-20070331-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

シャミッソーの言語観

——フンボルトの言語論と比較して——

秋山大輔

1．はじめに

シャミッソー Adelbert von Chamisso（1781-1838）は、短篇『ペーター・シュレミールの不思議な物語』*Peter Schlemihls wundersame Geschichte*（1814）やシューマン Robert Schumann（1810-56）の歌曲集『女の愛と生涯』*Frauen-Liebe und Leben*（1840）の作者としてドイツ文学史における後期ロマン派の詩人としての側面ばかりが注目されてきた。その一方で彼は軍事的、経済的理由によるロシアの探検調査旅行に自然研究者として参加し、その探検調査旅行の性格柄自然研究者としてはしばしば困難な局面に立たされながらも、少なからず賞賛に値する業績を残していることも忘れてはならないだろう。例えば、サンタ・カタリーナ島で発見されて進化論の基盤にもなったとされるサルパの世代交代に関する学説があり、それが評価されて帰国後まもなくベルリン・フンボルト大学から名誉博士号を授与された。もちろん彼によってあげられたこの探検調査旅行の成果はそれだけにとどまらず、西洋人として初めてハワイ語の文法書を執筆したように、言語学の分野での成果も特筆すべきことであろう。彼はハワイ・オアフ島でカメハメハ大王の歓待を受け、そこで目にしたさまざまな独特の風俗に強い関心を持ち、晩年にフンボルト Wilhelm von Humboldt（1767-1835）の南洋諸語研究を引き継ぐ形で本格的にハワイ語研究に着手し、そして文字どおりこの世の置き土産に西洋人として初めてその文法書を残したのである。

本稿ではシャミッソーがどのような内容のハワイ語の文法書を執筆したのかということではなく、どのような考え方を基盤にしてハワイ語研究に

取り組んだのかということに注目し、主として彼の言語観と言語研究における言語と民族精神の連関について考察する。これに関連して、まず同時代の代表的な言語学者であり、彼とも学問的に交流のあったフンボルトの言語観と言語研究の方法を踏まえなければならないだろう。これによって、本稿の主題のみならず、フンボルトとシャミッソーの言語研究の基盤をなす考え方には特徴的な共通点が多く認められることも明らかになると考える。

2．フンボルトの言語研究

シャミッソーは、彼が西洋人として初めて執筆したハワイ語の文法書『ハワイ語について』*Über die hawaiische Sprache*（1836）の冒頭で、フンボルトの南洋諸語研究に触れており、[1]フンボルトは言語研究における記念碑的な著作『人間の言語構造の相違性とそれが人間の精神的な発展に及ぼす影響について』*Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts*（1830-35）の中で、言語と民族精神の連関について次のように述べている:

> 「言語の比較研究は、言語の多様性を徹底的に究明することである。そこでは数えられないほど多くの民族が人間として自らに課せられた言語を発展させるという課題を解いている。ところが言語の比較研究

---

1) シャミッソーは1837年1月12日にベルリンのアカデミーでハワイ語の文法書『ハワイ語について』*Über die hawaiische Sprache*(1836)の冒頭部分を講演論文として発表している。Vgl. Chamisso, Adelbert von: *Über die hawaiische Sprache [Aus der Denkschrift über die hawaiische Sprache, vorgelegt der Akademie der Wissenschaften am 12. Januar 1837]*. In: Sämtliche Werke in zwei Bänden. Nach dem Text der Ausgaben letzter Hand und den Handschriften. Textredaktion Jost Perfahl. Anmerkungen, Glossar, der botanischen, zoologischen, geographischen, ethnischen Begriffe und Namenregister sowie Zeittafel und Nachwort von Volker Hoffmann. Bd. II. München 1975. S. 670-674.; Chamisso, Adelbert von: *Über die hawaiische Sprache*. Neudruck 1969 der Ausgabe Leipzig 1937, mit einer Einleitung von Elbert, Samuel H. Amsterdam 1969.

は、言語は民族の精神力が形成されることと連関しているという核心に結びつかなければ、すべてのより高い重要性を失ってしまうのである。……言語はその根のきわめて繊細な繊維のすべてを民族の精神力の中に張り、この民族の精神力が言語に適切に作用を及ぼせば及ぼすほど、言語が発展することも法則的かつ豊かなものになる」[2)]

この引用からも明確に感じとることができるように、世界中のさまざまな言語を実証的に研究するうえで、それらの言語の文法構造や語彙を精査し、それに加えて、個々の言語の特徴とそこに息づく個々の民族精神の連関の問題について考察することが、疑いなくフンボルトが晩年の言語研究の中できわめて重視していたことの一つである。

本章ではフンボルトの言語研究の初期の著作『言語発展のさまざまな時期に関連した言語の比較研究について』*Über das vergleichende Sprachstudium in Beziehung auf die verschiedenen Epochen der Sprachentwicklung*（1820）を資料とし、彼の言語観と言語研究の方法について考察する。[3)]なお、フンボルトの言語研究はきわめて多岐に渡っているために、ここでは考察の対象を主として言語と民族精神の連関の問題に限定し、例えば、ドイツ観念論哲学に関連づけた彼の言語哲学の展開には触れないこととする。

---

2) Humboldt, Wilhelm von: Über die Verschiedenheit des menschlichen Sprachbaues und ihren Einfluß auf die geistige Entwicklung des Menschengeschlechts. In: Wilhelm von Humbolts Gesammelte Schriften in 17 Bd. Hrsg. von der Königlichen Preussischen Akademie der Wissenschaften. Behr's Verlag. 1907; Photomechanischer Nachdruck, W. de Gruyter, Berlin 1968. Bd.7. S.14. 本論における原文からの引用の邦訳は、すべて拙訳である。

3) 本章のフンボルトの言語観と言語研究の方法についての考察は、以下の参考文献の考察を一部参考にしている：泉井久之助：『言語研究とフンボルト』. 弘文堂 1976年：亀山健吉：『言葉と世界：ヴィルヘルム・フォン・フンボルト研究』. 法政大学出版局 2000年；斉藤渉：『フンボルトの言語研究: 有機体としての言語』. 京都大学学術出版会 2001年.

2-1．フンボルトの言語観－有機体としての言語

フンボルトの言語観の基盤をなし、それを問題にするときに決して見落としてはならない重要なことは、彼が言語を有機体であるとみなしていたことであろう。彼は言語の特徴を次のように規定している：

> 「現在の海や山や河が形成される前に私たちの地球は大変動を起こしたものの、その後はほとんど変化がなかったように、言語にも完成された有機体の瞬間がある。有機的な構造は、すなわちその確固たる形態は、その瞬間からもはや変化しない。それに対して精神の生き生きとした産物である言語の中で、言語がますます洗練されて発展することは、既存の限界があるとはいえ、限りなく進んでいくのである」[4)]

そして言語が有機体であるとは、フンボルトの言葉を借りれば、次のようなことを意味する:

> 「言語もまた突然生れるものに他ならないのであろう。……言語はその実在のどの瞬間をとっても、それを一つの全体たらしめるものを所有しているにちがいない。……言語の中の個は他によって成立し、そしてすべては全体を貫き通している一つの力によって成立するという形で、言語はあらゆる有機体の特徴を共にしている」[5)]

このことを端的に言えば、多くの部分が集まって一つの全体をつくり、その部分と全体の間には必然的な連関があるということであり、これはまさに有機体の特徴である。フンボルトによれば、有機体であるすべての言語は、不変の構造を備えており、しかもそれは有機体であるために部分と部分が必然的に連関する一つの全体をつくっており、そしてそのような枠組みの中で言語は発展しているのである。

---

4) Humboldt, Wilhelm von: *Über das vergleichende Sprachstudium in Beziehung auf die verschiedenen Epochen der Sprachentwicklung*. In: Ebd. Bd.4. S.2.

5) Ebd. S.3.

2-2．フンボルトの言語研究の方法－言語と民族精神の連関について

言語のこの特徴に注目したフンボルトの言語観を考慮すれば、彼の言語研究の方法は自ずと規定されるだろう。すなわち彼の言語研究は一貫してその「言語の有機的な構造を考察すること、および（既存の限界の中で）発展する途上にある言語を考察すること」[6]に基づいている。これは上記の言語の不変の構造とみなされる言語の文法構造を考察し、また言語は既存の限界とされるその枠組みの中で発展するものであるから、この考察に併せる形で、発展する言語の諸々の様相も考察することであろう。言語が（既存の限界の中で）発展するというのは、具体的に言えば、言語の多様性のことであろう。フンボルトは世界中のさまざまな言語を実証的に研究していたことから、言語の多様性に関心を示していたことは間違いないと言える。ここでいう言語の多様性とは、いろいろな言語が世界中にあるという表層的な意味合いではなく、言語は（既存の限界の中で）発展する途上で諸々の様相を見せるのであり、その諸段階における言語ごとの差異を意味していると考える。この言語の多様性を生み出すのに大きな影響を及ぼしている要素の一つとして、彼は言語と民族精神の連関に注目し、本章の冒頭ですでに言及したように、言語研究はこの問題について考察することを中心に据えた比較研究を旨とすることを強調している。彼はそのときに見落としてはならない必要条件について次のように述べている：

> 「文法の個々の異なる特徴を見てとったり、そして多かれ少なかれ、一連の語を比較したりすれば、人々はそれで十分に事が足りると思ってきた。ところがきわめて未熟な民族の方言も自然が生んだ一つの高貴な産物であるから、細かく壊したり、断片的に描写したりすることはできない。そのような方言も有機的な存在であるから、人々はそれ相応に取り扱わなければならない」[7]

---

6) Ebd. S.8.

7) Ebd. S.10.

この引用からもわかるように、有機的な存在であるということは、そこに個性が認められるということでもある。それぞれの言語にはそれぞれの民族の個性が表れる。よってすべての言語には例外なく固有の価値が出てくるために、文化の成熟度に基づく言語の優劣を論じてはならないというような意味合いのことをフンボルトは強調するのである。彼のこの考え方は、本論の主題であるシャミッソーの言語観と言語研究における言語と民族精神の連関について考察するうえでもきわめて重要であることをここで付け加えておく。

このようにフンボルトの言語研究は、言語が有機体であるという考え方に基づき、言語の文法構造、言語の多様性、および個々の言語の特徴とそこに息づく個々の民族精神の連関について綜合的に考察することによって、諸々の様相を見せ、差異が認められる諸言語の中にもそれらが有機体であるがゆえに一つの全体をつくる必然的な連関があることを突き止めようとしたのではないだろうか。

3．シャミッソーの言語研究

シャミッソーが自然研究者として残した業績も一般的にはほとんど知られていないだろう。ましてや言語学者としてのそれなどは言うまでもない。しかし彼が晩年になって、それまで体系的にまとめられることのなかったハワイ語を本格的に研究しはじめ、西洋人として初めてその文法書を残したことは本稿の冒頭ですでに言及したとおりである。彼はいったいどのような考え方を基盤にしてハワイ語研究に取り組んだのであろうか。

本章ではまずシャミッソーの民族/民俗観を考察する。それを踏まえ、彼がどのような考え方を基盤にしてハワイ語研究に取り組んだのかということに注目し、彼とフンボルトの言語研究の基盤をなす考え方の共通点を考慮に入れながら、主として彼の言語観と言語研究における言語と民族精神の連関について考察する。

3-1．シャミッソーとハワイ

それを発見すれば列強の中で軍事的、経済的に主導権を握ることができる北西航路を求めて、アメリカ北西海岸全域を調査することになっていた

ロシアの探検調査旅行に自然研究者として参加していたシャミッソーは、その途中でハワイ諸島を訪れた。そこで彼の目に飛び込んできた島の様子を彼は後にハワイの没落史さながらに描写している。以下の引用はやや長いものの、否応なく西洋の支配下に置かれている一方で、それによって施された恩恵でもある安穏な暮らしを享受するハワイの様子が活写されているために、ほぼそのまま引用する：

「クックによって発見される前の1779年には童話的なぽつんと離れて存在している世界のように大洋から浮かび上がっていたハワイ諸島は、もはや私たちの手の届かないところにあるのではない。大洋という共同の海峡がそれらを私たちに結びつけている。帆の森がオアフ島のホノルルの港を覆っていて、この島は貿易の中心地、そして商品の集散地になっている。……宣教団と船員による相反する働きかけは、ハワイ諸島の原住民を西洋の開化した文明に良くも悪くも関与させるという点で手を結んでいる。ハワイ諸島の原住民は貿易に積極的に関与し、この島々はすべてその市場になった。……ハワイ原産の資源でもあるビャクダンの木は、森の奥の若木まで根こそぎにされたが、この島々はよそから来た船に食料と飲み物をたっぷりと与えて、さらに宣教団が木綿の栽培を熱心に促進することがこの島々が豊かになってゆくうえで新たな源泉になることを約束している。最新の報告はハワイの成功している状況について、繁栄している貿易について、そしてますます開花してゆく文明について華やかな様子を描いている。倉庫付きの石造りの家々、商店、そして料理屋がホノルルの民族固有の藁葺き屋根の家々の間に聳え立ち、そこではさまざまな貿易大国が領事を正式に派遣していて、慣れ親しんだ贅沢を止めることができない西洋人にとってはほとんど故郷の街にいるかのように感じられる。……いたるところに学校がある。……マウイ島とホノルルには印刷所がある。さまざまな新聞が原則的にハワイ語と英語で発行されている」[8)]

---

8) Chamisso, Adelbert von: *Über die hawaiische Sprache [Rechenschaftsbericht von den fortgesetzten Studien der hawaiischen Sprache]*. In: Ebd. S.527-528.

このように島の隅々まで容赦なく西洋の経済的支配の魔の手がのびていく中で、シャミッソーはハワイ諸島の原住民とその独特の風俗までもが西洋の文化の色に塗りつぶされていくのを批判的な眼差しで鋭く見抜いている。[9]そして彼は西洋の傲慢を厳しく省察し、文化の成熟度に基づいて民族と民族の間に優劣を認めない。[10]このことはシャミッソーの言語観と言語研究における言語と民族精神の連関について、とりわけここではフンボルトの言語観と比較して考察するうえでも決して見落としてはならないことである。

3-2. シャミッソーとハワイ語研究

さて、シャミッソーがハワイ語研究に着手したのは、探検調査旅行で訪れたハワイ・オアフ島でカメハメハ大王の歓待を受け、そこで目にしたさまざまな独特の風俗に魅かれたからだとされている。たしかにそれも誤りではないだろう。しかし法律家で彼の親友でもあり、また彼やホフマンEoToAoHoffmann（1776-1822）の優れた伝記作家としても知られるヒッツィヒ Julius Eduard Hitzig（1780-1849）が伝記『シャミッソーの生涯と書簡集』*Leben und Briefe von Adelbert von Chamisso*（1839）の中でその一端を紹介しているように、彼は探検調査旅行中に、そしてそれを終えてからすぐに南洋諸島の諸言語を研究しはじめていたことから、わざわざ晩年になってハワイ語研究に着手した直接的な動機は他にあったと考える方が妥当で

---

9) Vgl. Chamisso, Adelbert von: *Reise um die Welt mit der Romanzoffschen Entdeckungs-Expedition in den Jahren 1815-18.* In: Ebd. S.137-138;「今ではもう遅すぎるだろう。……ハワイ島で宣教団のシャツが美しい身体を覆ってしまい、あらゆる芸術的な遊戯は沈黙している」.

10) Vgl. Ebd. S.137;「私たちはバレエと称してバレリーナのとる無理な姿勢をやたらに賞賛しているが、私がかつてバレエの素晴らしさについて述べたことは、まったく色褪せてしまい、見るにふさわしくないもののように感じられる。私たちこそが野蛮だったのだろう！かの美意識の才能に恵まれた人々を「野性人」と呼ぼう。そして、恥ずべき作家や嘆いている役者を、私たちがバレエを芸術に捧げていたのを自慢している劇場の中から排除しよう」.

あろう。そこでその動機について彼の親友は次のように記している：

「……フンボルトは南洋諸語に関する論文を、その注釈を用意するように要請して、シャミッソーに委ねた。……ところがフンボルトは南洋諸語、すなわちハワイ語を彼の言語研究のより近い分野に引っ張り込む前に亡くなってしまったことから、シャミッソーがフンボルトの仕事を補完するために、まずハワイ語の文法書と辞書を編纂しようとした」[11)]

またシャミッソー自身もデンマークの童話作家アンデルセン Hans Christian Andersen（1805-75）に宛てた書簡の中で、次のように記している：

「私はあることを計画していました。……それは言語研究です。私は今きわめて熱心にハワイ語の研究をしており、いつかハワイ語もこの語族のすでによく知られているいくつかの部門の列に加えるうえで、まだ欠けている文法書を執筆し、辞書を編纂する準備をしています。ヴィルヘルム・フォン・フンボルトが亡くなったことによってそのままにされていた欠落部分をできる限り補足することが私の探検調査旅行の使命だったということです」[12)]

これらの引用からもフンボルトの南洋諸語研究の後継者として彼がハワイ語研究に着手したということがはっきりとわかり、[13)]フンボルトとシャミッソーという点と点が言語研究という一本の線によってしっかりと結ばれ

---

11) *Leben und Briefe*. In: Chamisso, Adelbert von: Adelbert von Chamissos Werke/ Hrsg. von Julius Eduard Hitzig.- Unveränd. Nachdr.- Eschborn bei Frankfurt a. M.: Klotz Bd. 5/6. Unveränd. Nachdr. der 5., verm. (und berichtigten) Aufl., besorgt von Friedrich Palm, Berlin, Weidmann, 1864. 1. Auflag. Frankfurt a. M. 2000. S.137.

12) Ebd. S.328.

13) アレクサンダー・フォン・フンボルト Alexander von Humboldt（1769-1859）提案によって、前任者であるヴィルヘルムの死後、シャミッソーはベルリンのアカデミーの言語研究における彼の後継者に就任する。

るのである。

3-3．シャミッソーの言語観と言語研究の方法
—言語と民族精神の連関について

シャミッソーがどのような考え方を基盤にしてハワイ語研究に取り組んだのかということに注目し、彼とフンボルトの言語研究の基盤をなす考え方の共通点を考慮に入れながら、主として彼の言語観と言語研究における言語と民族精神の連関について考察するうえで、まずシャミッソーの言語研究の方法に着目する：

> 「この民族の中で生活する者だけが彼らの状況、風俗、そして術に精通し、彼らの言語の語根語の本来的な意味、拡大された意味、派生的な意味、そして比喩的な意味について報告することができるのである」[14)]

この引用から読み取れるように、彼は言語と民族精神が相互に連関していることを見抜いており、その仕組みを突き止めるためには言語を実証的に研究することが不可欠であることを把握している。また彼は自らの言語研究もハワイ語研究のみならず、最終的にはそれを軸にその周辺の諸言語との比較研究を課題としていたこともわかる：

> 「……ハワイ語をしっかり自分のものにしてから、それを印刷物や文法書や語彙集によって私たちの知るところとなっている他の言語やハワイ語と同じ語族に属する方言と比較してみることが私に残されていることだと思った」[15)]

---

14) Chamisso, Adelbert von: *Über die hawaiische Sprache [Rechenschaftsbericht von den fortgesetzten Studien der hawaiischen Sprache]*. In: Ebd. S.526.

15) Chamisso, Adelbert von: *Über die hawaiische Sprache [Aus der Denkschrift über die hawaiische Sprache, vorgelegt der Akademie der Wissenschaften am 12. Januar 1837]*. In: Ebd. S.519.

これに加えて、彼が探検調査旅行でハワイ諸島のみならず、その他の南洋諸国も訪れていることや本章で考察した彼の民族観/民俗観を考慮すれば、彼が言語の多様性に関心を示していたということも想像に難くないであろう。このように実証的研究や比較研究をきわめて重視する言語研究の方法をとるシャミッソーとフンボルトの間には、その基盤にある考え方にも共通点があると考えられる。言語と民族精神の連関についてさらに言えば、シャミッソーはハワイ諸島で布教活動に奔走する宣教団が編纂した印刷物を引き合いに出すことによって、民族精神の結晶としてハワイ諸島の原住民の中に脈々と受け継がれてきたさまざまな伝統にまったく頓着することのない宣教団の即物的な価値観を鏡に映し出し、それを西洋の傲慢として厳しく省察している：

> 「……宣教団の報道関係者によって生まれ、そしてことごとくハワイ諸島の原住民に西洋の開化した文明という彼らにとってきわめて未知の世界を見せる意図の下で編纂されたすべての印刷物の中には、この種族の古代のものを、そして民族固有のものを－すなわち群れをなして居住している状況、教義、風俗、歴史、伝説、神話、祭式、そして典礼の言語などのことであるが－記憶にとどめておくという目的のために捧げられたものは一つもない。……人類の歴史やそれらの地上での移動の歴史を教えてくれるきわめて重要な謎の一つを解くすべての鍵は、それらが私たちの手の中にあるうちに、私たち自身によって、忘却の海の中へと沈められている」[16)]

ここに民族/民俗研究でも見られたシャミッソーの考え方が言語研究でも見られる。すなわち文化の成熟度に基づいて民族と民族の間に優劣を認めないシャミッソーは、言語と言語の間にも優劣を認めないのである。これは言うまでもなくシャミッソーが言語に固有の価値を認めていたということである：

---

16) Ebd. S.522.

「物や概念などは彼らにとってさながら未知のものであって、これまで聞いたこともないものだった。……すべての未知のものについては未知の言葉を使って話してはならないのであろうか。いや、そんなことはないだろう。ところが彼らの素朴な言語には思いがけないほどの柔軟性があり、私はすべてのことについてハワイ諸島の原住民と言葉を交わすときには彼らの言葉を使う」[17)]

ここで言語が有機体であるとするフンボルトの考え方を考慮すると、シャミッソーもフンボルトと同じように、言語を有機体であるとみなしていたのかもしれないという疑問がにわかに浮かんでくる。本章で引用したシャミッソーのアンデルセン宛ての書簡にはこの疑問を解く鍵になると考えられる続きがある。それはフンボルトの言語研究の地平を見晴るかしたうえで、その後継者と目されている自身の言語研究の使命に言及したものである：

「……彼は言語研究をインドからジャワを経由して南洋諸島まで広げており、私が試みるのは断ち切られた連鎖の最後の環を拾い上げることです」[18)]

これに加えて、表現がこの書簡に近似しており、しかもハワイ語研究に直接的に言及している彼の別の言説もあわせて考えてみる：

「…ハワイ語の知識は、この知識から実り豊かな成果をあげるうえで、東アジアやインドの言語の知識と組み合わせて、連鎖の遠く離れた環として、言葉を使う人間の言語を概観的に比較するために使われなけ

---

17) Ebd. S.522-523.

18) Ebd. *Leben und Briefe*. In: Chamisso, Adelbert von: Adelbert von Chamissos Werke/ Hrsg. von Julius Eduard Hitzig.- Unveränd. Nachdr.- Eschborn bei Frankfurt a. M.: Klotz Bd. 5/6. Unveränd. Nachdr. der 5., verm. (und berichtigten) Aufl., besorgt von Friedrich Palm, Berlin, Weidmann, 1864. 1. Auflag. Frankfurt a. M. 2000. S.328.

ればならないだろう」[19]

これらの引用からわかることは、シャミッソーがハワイ語を南洋諸島の諸言語の連鎖の環の一つであると考えていたということである。ここには言語と言語の間にある有機的なつながりというものを意識していた可能性が十分にうかがえる。また彼はハワイ諸島で布教活動に奔走する宣教団が用いる新約聖書やその報道関係者らの手による出版物について言語研究の観点からも批判的に言及しており、そこには彼が言語を有機体であるとみなしていたと考えられる示唆的な表現がある：

「新約聖書の新版と同時にホノルルとラハイナルナの報道関係者から出された出版物において、言語の使い方と正書法は、多くの点でまだ頼りないものである。ハワイ語を書きとっている書物は、ハワイ語の内的な必然性を理解するまでには到達しておらず、ハワイ語の文法の法則を意識できていなかったことに気づくのである」[20]

やはり彼の言語観の中心にも言語が有機体であるという考え方があったのではないだろうか。たしかにシャミッソーは言語の特徴を表現するときに「有機体」という言葉は使っていない。けれども彼も言語研究においては、ハワイ語研究にも見られるように、言語の文法構造に着目し、言語には多様性があることを認識し、比較研究をきわめて重視している。このような言語研究の方法をとることによって彼が突き止めようとしたことは、フンボルトと同じように、諸々の様相を見せ、差異が認められる諸言語の中にもそれらが有機体であるがゆえに一つの全体をつくる必然的な連関があるということではないだろうか。日記や書簡によってそれを裏付けることはできないものの、このように彼の言語観と言語研究における民族と民族精神の連関について考察すれば、彼の言語研究の方法はフンボルトのそれと

---

19) Chamisso, Adelbert von: *Über die hawaiische Sprache [Rechenschaftsbericht von den fortgesetzten Studien der hawaiischen Sprache]*. In: Ebd. S.531.

20) Ebd. S.525.

まったく同じと言っても過言ではなく、彼の言語研究の基盤をなす考え方の隅々までフンボルトのそれが染み渡っていたということは想像に難くない。

4．おわりに

ここでぶつかるのは次の問題である。それはシャミッソーが言語のみならず、自然も有機体であると考えていたのかどうかということである。彼の民族/民俗観、言語観、そして言語研究における民族と民族精神の連関についての考察から導き出されたことを踏まえれば、その答えについても察しがつくのかもしれない。彼はかの探検調査旅行に自然研究者として参加する前に奇しくもベルリン・フンボルト大学で植物学、動物学、解剖学、鉱物学、並びに自然哲学を学び、そして帰国後には詩人として生きる傍らで、植物学者としてもさまざまな珍しい植物を採集することに精を出し、リンネのようにそれらの体系化を試みるなど間違いなく同時代の自然の捉え方が色濃く見られる活動を展開している。これらの学問を一瞥し、それに植物学者としての彼の手法を併せて考えれば、彼が博物学的な自然観に基づいて自然を解釈していたと想像しても不思議ではない。ところが彼は時代的に急速に細分化の道を辿って行く自然研究の過渡期に立たされている自然研究者の一人であるために、彼がどのような自然観を築いていたのかについて、そして彼の自然の捉え方が変化する時点については、あらためて書簡、『世界旅行記』*Reise um die Welt mit der Romanzoffischen Entdeckungs-Expedition in den Jahren 1815-18*（1821, 1836）、[21] および植物学に関する諸論文の記述を精査し、そこから同時代の自然観の文脈で考察しなければならない。

---

21) シャミッソーの『世界旅行記』は、第一部『日記』Tagebuch (1836) と第二部『注釈と見解』*Bemerkungen und Ansichten* (1821) の二部構成である。

参考文献

Chamisso, Adelbert von: Sämtliche Werke in zwei Bänden. Nach dem Text der Ausgaben letzter Hand und den Handschriften. Textredaktion Jost Perfahl. Anmerkungen, Glossar, der botanischen, zoologischen, geographischen, ethnischen Begriffe und Namenregister sowie Zeittafel und Nachwort von Volker Hoffmann. Bd. II. München 1975.

Chamisso, Adelbert von: Adelbert von Chamissos Werke/ Hrsg. von Julius Eduard Hitzig.- Unveränd. Nachdr.- Eschborn bei Frankfurt a. M.: Klotz Bd. 5/6. Leben und Briefe. Unveränd. Nachdr. der 5., verm. (und berichtigten) Aufl., besorgt von Friedrich Palm, Berlin, Weidmann, 1864. 1. Auflag. Frankfurt a. M. 2000.

Chamisso, Adelbert von: Über die hawaiische Sprache. Neudruck 1969 der Ausgabe Leipzig 1937, mit einer Einleitung von Elbert, Samuel H. Amsterdam 1969.

Humboldt, Wilhelm von: Wilhelm von Humboldts Gesammelte Schriften in 17 Bd. Hrsg. von der Königlichen Preussischen Akademie der Wissenschaften. Bd. 4, 6 und 7. Behr ユ s Verlag. 1907; Photomechanischer Nachdruck, W. de Gruyter, Berlin 1968.

Borsche, Tilman: Wilhelm von Humboldt. München 1990.

Borsche, Tilman: Sprachansichten. Der Begriff der menschlichen Rede in der Sprachphilosophie Wilhelm von Humboldts. Stuttgart 1981.

Schiller, Hans-Ernst: Die Sprache der realen Freiheit: Sprache und Sozialphilosophie bei Wilhelm von Humboldt. Würzburg 1998.

フンボルト, ヴィルヘルム・フォン：言語と人間．岡田隆平訳　ゆまに書房 1998 年.

トラバント, ユルゲン：フンボルトの言語思想．村井則夫訳　平凡社　2001 年.

福本喜之助：フンボルトの言語思想とその後世への影響．関西大学出版部 1982 年.

泉井久之助：言語研究とフンボルト．弘文堂　1976 年.

亀山健吉：言葉と世界：ヴィルヘルム・フォン・フンボルト研究．法政大学出版局　2000 年.

斉藤渉：フンボルトの言語研究：有機体としての言語．京都大学学術出版会 2001 年.

西村貞二：フンボルト．清水書院　1990 年.

デュルクハイム, グラーフ・フォン：民族性と世界観．橋元文夫訳　理想社出版部　1940 年.

佐々木現順：人間・その宗教と民族性．清水弘文堂　1973 年.

（慶應義塾大学大学院文学研究科独文学専攻後期博士課程 2 年在学中）

Chamissos Sprachauffassung
Im Vergleich mit Humboldts Sprachtheorie

AKIYAMA, Daisuke

Auf Chamisso als Sprachwissenschaftler wird in diesem Aufsatz die Aufmerksamkeit gerichtet und eine bis jetzt kaum behandelte Seite seines Werkes untersucht. Er machte sich eigentlich mit seinem „Peter Schlemihl" berühmt, und man hat im Allgemeinen immer noch die Tendenz, das Untersuchungsthema auf sein merkwürdiges Hauptwerk zu fokussieren, wenn man in einem Aufsatz Chamisso thematisiert. Er vollbrachte jedoch nicht nur als Dichter, sondern auch als Sprachwissenschaftler ausgezeichnete Leistungen: Er befasste sich in seinen letzten Jahren mit dem hawaiischen Sprachstudium und verfasste schließlich zum ersten Mal als Europäer eine hawaiische Grammatik.

Chamissos Auffassung der Sprache wird darum in diesem Aufsatz mit einem zeitgenössischen repräsentativen Sprachwissenschaftler, Wilhelm von Humboldt, verglichen: Allerdings wird nicht der Inhalt seiner hawaiischen Grammatik in einer Übersicht dargestellt, sondern Gewicht darauf gelegt, welche Auffassung seinem hawaiischen Sprachstudium zu Grunde lag. Sie bezieht sich vor allem auf die Problematik des Zusammenhanges zwischen Sprachen und "nationalen" Geisteskräften. Darüber hinaus stellt es sich auch heraus, dass es Gemeinsamkeiten zwischen Chamisso und Humboldt -Chamisso wurde in der Tat in der Berliner Akademie der Wissenschaften zum Nachfolger von Humboldt ernannt- als Sprachwissenschaftler gibt, indem man Humboldts Sprachtheorie in Betracht zieht.

Zunächst hat besondere Wichtigkeit, dass Humboldt die Sprache als einen Organismus betrachtete. Alle derartige Sprachen, die so miteinander in

notwendigem Zusammenhang stehen, besitzen seiner Auffassung nach einen unabänderlichen Bau, nämlich einen grammatischen Bau und entwickeln sich innerhalb dieser Grenze. Sein Sprachstudium gründete sich darum auf die Untersuchung des Organismus der Sprachen, und die Untersuchung der Sprachen im Zustande ihrer Ausbildung, anders ausgedrückt, untersuchte er durch das auf Bestätigung beruhende und vergleichende Sprachstudium, wie die Sprachen sich auf der Welt entwicklten. Die Entwicklung der Sprache, oder die Ausbildung der Sprache meint ihre Mannigfaltigkeit, und dies hat keine oberflächliche, sondern eine entscheidende Bedeutung: Die Sprachen gestalten sich in ihren Entwicklungsphasen verschiedenartig, und ihre Mannigfaltigkeit bedeutet darum die Unterschiede zwischen den Sprachen, die sich in ihren Entwicklungsphasen zeigen. Nun fasste Humboldt die Problematik des Zusammenhanges zwischen Sprachen und nationalen Geisteskräften ins Auge. Die jeweiligen nationalen Geisteskräfte hätten einen Einfluss auf die Entwicklung der Sprache ausgeübt. In diesem Zusammenhang war er der Auffassung, dass jede einzelne Sprache als Organismus eine unverwechselbare Individualität habe. Auf Grund des Reifegrades der jeweiligen Kultur bildetete er sich kein bestimmtes Urteil über den Wert der Sprache. Weil die Sprachen Organismen sind, gibt es für Humboldt einen notwendigen Zusammenhang, der sie jeweils zu einem Ganzen macht, auch wenn ihre Gestaltungen sich in verschiedenen Entwicklungsphasen zeigen.

Was Chamissos Sprachauffassung betrifft, steht in diesem Aufsatz zunächst seine Äußerung über die hawaiischen Inseln im Vordergrund. Darin kritisierte er scharf das hochmütige Verhalten der Europäer, die von oben herab die hawaiischen Inseln völlig veränderten. Im Gegensatz zur Kolonialpolitik hielt er trotz des unterschiedlichen Reifegrades der Kulturen an der prinzipiellen Gleichwertigkeit zwischen Eingeborenen und Europäern fest. Gerade diese Auffassung spiegelt sich auch in seiner Konzeption von Sprache wider. Wenn man nun zweitens zurückverfolgt, unter welchen Gesichtspunkten er sich mit dem hawaiischen Sprachstudium beschäftigte, ergibt sich, dass es in mehreren Punkten Gemeisamkeiten zwischen Chamisso und Humboldt als Sprachwissenschaftler gibt. Z. B. ist ihnen gemeinsam, dass sie dem auf Bestätigung beruhenden und

vergleichenden Sprachstudium Wichtigkeit beilegten und an der Mannigfaltigkeit der Sprachen Interesse hatten. Es versteht sich von selbst, dass Chamisso sich gleich Humboldt nur auf Grund des Reifegrades der jeweiligen Kultur kein bestimmtes Urteil über den Wert der Sprache bildete. Alles in allem lässt sich sagen, dass auch Chamisso die Sprache als Organismus betrachtete. Er drückte mit einigen Schlüsselworten einen organischen Zusammenhang zwischen Sprachen aus. Er betrachtete z. B. die hawaiische Sprache als »das letzte Glied der abgebrochenen Kette« oder »ein entferntes Glied der Kette«, und sie enthalte »ihre(r) inner(n) Notwendigkeit«. Er gebrauchte zwar nie das Wort "Organismus", aber man kann aus dieser Untersuchung Schlüsse darauf ziehen, dass er im Sprachstudium mit Humboldt vergleichbare Ziele verfolgte.

Schließlich scheint auch wichtig, ob Chamisso nicht nur die Sprache, sondern auch die Natur als Organismus betrachtete. Bevor er als Naturforscher mit der Romanzoffischen Entdeckungs-Expedition in den Jahren 1815-18 an der Reise um die Welt teilnahm, studierte er wunderbarerweise an der Humboldt-Universität Botanik, Zoologie, Anatomie, Mineralogie und Naturphilosophie. Nachdem er von dieser Reise nach Berlin zurückgekommen war, war er neben seinem literarischen Werk auch als Botaniker tätig. Er sammelte merkwürdige Pflanzen und brachte sie in ein System wie Linné. Wenn man einen Blick auf seine wissenschaftlichen Tätigkeitn wirft, dürfte es einerseits nicht verwundern, dass er von der Natur eine naturgeschichtliche Anschauung hatte. Aber andererseits war er auch ein Naturforscher im Übergang von der naturgeschichtlichen zu neuen Naturanschauungen. Es ist darum wichtig, auf sein Tagebuch der Reise um die Welt, seine Briefe und seine wissenschaftlichen Abhandlungen über Botanik einzugehen und seinen daraus abgeleitete Naturanschauung mit der zeitgenössischen in Zusammenhang zu bringen.